Japanese Association for Religious Studies

重し、運命学は「宗教」を凌駕するものとする。ここでの「宗教」は、既存の諸宗教のことであるが、昭和恐慌後の人心の荒廃により思想善導の必要性を感じていた熊崎は、門人から要請されたこともあり、既存の「宗教」とは異なる、自らの新たな「宗教」の展開へと踏み込んでいく。太極から天地間の万象がことごとく生み出されるとする易の世界観は、それ自身では整然とした世界認識に基づく、「合理的」とも言える自然哲学体系である。これを、心道として再編成することは、時代の要求に沿う宗教の必要性を訴え、既成宗教の前近代性を克服しようとする、熊崎の独自の試みでもあった。

熊崎にあっては、基本的に依拠するところは易の数理的かつ思弁的な世界観であり、強調点に多少の変化は見られるものの、解釈に大きな転換は見受けられない。熊崎の運命学から宗教への変容は、個人的救済に関わる思想体系から社会的性格を持つ形而上学への移行という位相変化とも理解される。そこで「宗教」とされたものは、社会への回路を開く営みであった。「済世救民」という言葉に現れるような社会への関与を熊崎は「宗教」とし、理論の純化と著述、そして運命学実践というような形態で活動していく。

、心道は既存の宗教伝統、あるいは新宗教に基盤を持たない形で成立し、運命学、とりわけ易の思想が宗教として再編成をみたという特徴が明確に見られる事例である。近代日本の新宗教は儒教伝統の影響を受けているとしばしば言われるが、そこに含まれる儒教的要素の直接的影響関係を捉えることは難しい場合が多い。その中で、、心道は儒教伝統の一部である易の影響が明瞭に教義上に見出せる点で稀有な事例といえる。今後は、調査を進めて、、心道や熊崎の思想の展開の内実をより明らかにするとともに、筆者が関心を抱いている、近代における思想体系としての易の解釈史やその位置づけの文脈で、熊崎の自己表明と、自己理解をさらに追究したい。

「みかぐらうた」のひのきしん

堀内 みどり

諸井慶徳は『ひのきしん序説』（昭和二八年改訂版）において、「『ひのきしん』といふ言葉は、近頃むやみにもてはやされて来たやうである。これは一面において寔に心うれしいことではあるが、また他面深い留意が要求せられてならない。……我々は実に『ひのきしん』なる概念の下に我々の行為の在り方を表現せずにはゐられない。それは本教徒の用ゐる一般的代名詞ではなくして一つの内容豊かな固有名詞であるからである。」と述べる。「ひのきしん」が天理教を世に知らしめた行動・活動であったことは、昭和七年に書かれた松村吉太郎『ひのきしん精神』にも、『ひのきしんの意味と展開』（昭和四六年）にも前提のように表記され、自覚されていると同時に、「ひのきしん」の教義的理解や研究は不十分であるという認識が常にあった。

『改訂天理教事典』にも、「天理教信者の積極的な神恩報謝の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

行為を、すべて『ひのきしん』という。漢字をあてれば、『日の寄進』であり、日々親神に寄進するという意味を持つ。『ひのきしん』は天理教信仰の行動化された姿そのものである。『天理教教典』には『日々常々、何事につけ、親神の恵を切に身に感じる時、感謝の喜びは、自らその態度や行為にあらわれる。これを、ひのきしんと教えられる』と述べられている。」と記され、「ひのきしん」が天理教の行動様態を表象する言葉であることは明らかである。この「ひのきしん」という用語は、原典中「おさしづ」に一回出てくる以外は、「みかぐらうた」の中に見られ、「ひのきしん」の教理の要諦は、「みかぐらうた」で示される。この「みかぐらうた」で教えられたということが重要で、個人を自己浄化あるいは信仰の深化に向かわせる「ひのきしん」を、社会的活動を積極的に行わせる根拠として示し得ると考える。諸井は、「手踊りを行はして頂く心は又ひのきしんをつとめる心に相通ふ。…特に両者はその際の信仰的気持に於て密接なつながりを持つてゐると思はずにはゐられない。」と感じ、「「ひのきしん」と「てをどり」は、…「おたすけ」とともに、実に本教の動的体現の三綱領」と言う。

諸井慶一郎は、「『ひのきしん』と『たすけあい』」（昭和四六年）の中で、「ひのきしん」は信仰の物種・肥となるものであり、それゆえ、「ひのきしん」に励む主体の動機は、「かりものの理」が治まった「たんのう」の心から流れ出る神への感謝の喜びであるとする。それは金品ではなく、行為の寄進であり、陽気ぐらし世界建設およびその象徴としてのつとめ場所〈おたすけ〉建設がはたらきの対象であると説く。そして、「日々の生活そのものを寄進化するのは『たすけあい』の実を生活活動に於いて現すことによって可能となり、逆に『たすけあい』の実践は、親神への寄進として行うのだという内的動機付けによって信仰活動となる」と結論づける。すなわち、「ひのきしん」は「たすけあい」の実践における内的動機として十分なる役割を果たすのである。あらゆる行為やその結果は神に捧げられてこそ、「欲を忘れて」の行動（「みかぐらうた」十一：四）が実践でき、個人の修養となる。

「みかぐらうた」は第一節（慶応二）、第二節（明治三）、第三節明治八（ぢば定めも）、第四節（明治三）、第五節（慶応三）と教えられたが、現存する慶応三年から明治十年までの「みかぐらうた本」は第五節（六七回大会の発表要旨の年代の誤記をお詫びします）で、これは「みかぐらうた」の「てをどり」の地歌に相当すること、「てをどり」で天理教が伸展してきたという歴史を考えると、そこに在った信仰的歓喜と熱狂とが他者への「たすけ」という関わりとなって、信者たちの「生命的教導」となったのではないか。したがって「みかぐらうた」で教えられた「ひのきしん」という行動は、「たすけあい」の行為として他者へと向かうのである。

NII-Electronic Library Service